

[上総国分尼寺跡(市原市)]探訪レポート

正面は上総国分尼寺跡





左へ進み、まずは展示館を見学する



前方が展示館





史跡上総国分尼寺跡展示館





前方に復元された金堂院が見える





振り返って展示館を見る



一帯が上総国分尼寺跡



正面は経楼跡



正面は鐘楼跡







回廊、中門からなる範囲を「金堂院」と呼ぶ/回廊は瓦積み基壇の上に立つ/奈良時代後半当時の姿を復元したという

回廊と金堂基壇の復元について

国分尼寺の本尊を祀る金堂を中心として、回廊、中門からなる範囲を金堂院こんどういんと呼びます。平成3～8年度の整備事業によって、この金堂院の復元が完成しました。

回廊は、幅20尺=6mの瓦積み基壇きだんの上に立つ、礎石建てたんろうの単廊です。国分尼寺の他の建物同様、平安時代に至るまで何度か建て替えられたことが発掘調査からわかっていますが、ここでは伽藍がらんが最も整備された奈良時代後半当時の姿を復元しました。

復元にあたっては、建築史学の研究成果と発掘調査の結果をもとに、古代の回廊として唯一の現存例である法隆寺回廊、建物部材が出土した山田寺回廊等を参考とし、古代建築の特徴を忠実に再現しました。

金堂けだうは桁行7間23.4m、梁行4間13.2mの四面庇ひさし付きの七間堂でした。堂の内部には須彌壇みだんが設けられ、本尊が安置されていました。

このたびの復元では、瓦積み基壇きだん上に、柱位置には礎石を据付け、壁位置には狭間石はざまいしを並べ据えました。また、須彌壇側面の格狭間の模様は、奈良時代の遺構である坂田寺講堂跡の須彌壇の出土例を参考にしています。

金堂及び中門の中央を結ぶ軸線上に再現した瓦敷の参道とうろう上には、青銅製の燈籠を復元しました。復元は、同時代の唯一の現存例である東大寺燈籠を参考とし、近年の研究成果に基づいて行いました。

〔回廊の構造および規模〕

木造、中門左右折れ廻り各25間(東75.75m、西76.5m)、梁間1間3.75m。本瓦葺き。

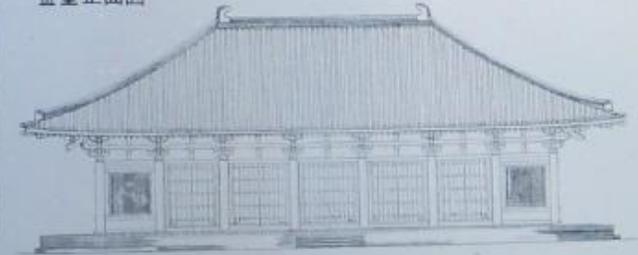
高さ約5m。柱直径30cm、同高さ2.7m、屋根面積1103㎡

廻物ひらまつと：平三斗。架構こうりょう：虹梁にじりょう又首。軒廻ひとのき：一軒、繫垂木しげだるま。



金堂院遺構写真(西側から。中央右が中門跡。上列、下列が回廊跡の一部。左手立木群が金堂跡。)

金堂正面図



金堂側面図



回廊





21世紀によみがえる史跡

国指定史跡上総国分尼寺跡は、市原市が奈良・平安時代、上総国の政治・文化の中心であったことを象徴する歴史的文化遺産です。

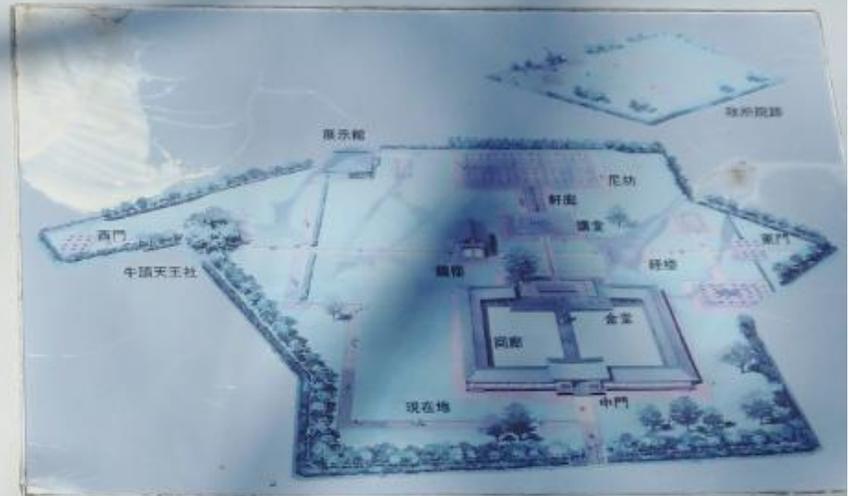
市原市では、この貴重な史跡を保存し、子孫に継承していくと共に、市民の郷土史学習や憩いの場として活用するために、平成2年度に環境整備基本計画を策定しました。今回の計画の特色は、野外の史跡と一体的なガイダンス施設である展示館と歴史的建造物の復元です。

計画に基づき、平成2年度に展示館を、平成3、4年度に復元中門を建設いたしました。さらに、平成5年度から回廊復元工事に着手しています。平成9年3月には金堂基壇を含めた金堂院の一郭がよみがえります。その後、鐘樓を復元する計画です。

歴史的建造物の復元と並行して、東門・西門・経樓・講堂・軒廊・尼坊・政所院跡などの基壇表示や修景等の平面整備を進め、21世紀には、天平の史跡が現代によみがえる予定です。

平成6年3月

市原市教育委員会



史跡上総国分尼寺跡環境整備事業完成予想図

指定年月日	昭和58年8月30日
	昭和61年1月23日(追加)
指定面積	38,120. ³¹ m ²
整備面積	37,710. ⁸⁹ m ²
伽藍地地区	27,946. ⁵⁴ m ²
政所院地区	9,764. ³⁵ m ²



中門



復元中門について

中門は、国分尼寺の本尊を祀る仏のための空間である金堂院の南正面の門です。特別な行事の時だけ使われ、ふだんは閉じられていました。

中門跡については、昭和43年度の調査で位置が確認され、昭和63年度の調査で、規模・構造・変遷が明らかになりました。

復元にあたっては、発掘調査の結果をもとに、現在残っている法隆寺東大門、東大寺転害門、唐招提寺金堂、海竜王寺西金堂などの奈良時代の建築遺構を参考にして設計し、建築史の専門家の指導を受けながら厳密に行いました。

復元では、まず旧表土の上に50cm盛土し、盛土内に鉄筋コンクリートのべた基礎を設け、遺構の保護と復元建物の安全を図りました。

基壇は上面に甃を敷きつめた瓦積み基壇とし、礎石は蛇紋岩自然石としました。木材には、性質が良く加工しやすく、強度や耐久性にも優れたいわゆる木曾檜を選びました。ただし、柱から上の重みがかかる大斗にはかたい樺を、軒先の垂木や足元の地覆には水に強いヒバを用いました。

瓦の文様は出土瓦にならい、屋根だけで5600枚あまり使い、重さは17トン近くに達します。

木部の表面はヤリガンナで仕上げ、主要部には紅柄を塗り、木端には黄土、金剛柵には緑青を塗りました。壁は漆喰を塗って仕上げています。

復元中門は、部材がおおがらで、単純で力強い構造的な美しさが特色です。



中門跡全景(南から、正面の木立が金堂跡)

[構造形式] 木造、切妻造り、本瓦葺き、三間一戸、八脚門、二重虹梁墓股、三棟造り、平三斗組、二軒、繫垂木

[規模] 間口3間9.9m (33尺=9.5+14.0+9.5)
奥行2間5.4m (18尺=9.0+9.0)、高さ約7m
柱直径45cm、高さ3.6m
基壇東西12m (40尺)、南北8.7m (29尺)、高さ約57cm (1.9尺)

中門正面





主要部は紅柄(べんがら)塗り、木端(きばな)は黄土、金剛柵は緑青塗り、壁は漆喰塗りで仕上げられている



反った軒に対して軸部を調和させるため、隅柱を他の柱よりほんの少し高くする手法(隅柱の伸び、生起/中国)を使おうとしたのか？



礎石は蛇紋岩自然石/木材は木曾檜、欅、ヒバが使われているという





壁の下には狭間石が並べ据えられている



上面に藁(せん)を敷きつめた瓦積み基壇



正面は金堂基壇



金堂基壇









正面は青銅製の燈籠







上記との足元の処理の違い？







青銅製の燈籠





八角燈籠とある



八角燈籠

本園内に明るく照らすといふ目的で
ての味もありましたが、私に
う意味もありました。一
を大寺にある八角燈籠を参考にし、約二分の
を大寺で作ったものです。当時は、燃料と
して油を使っていたようです。















今ひらく 天平の扉

国分寺の建立

史跡上総国分尼寺跡は、市原市が古代上総国の政治・文化の中心地であったことを象徴する歴史的文化遺産です。

国分寺は、今から千二百五十年ほど前の奈良時代の中ごろ、国の平和と繁栄を祈るために、全国六十か所余りに建てられた僧寺と尼寺からなる国立寺院です。

国分寺が創建された天平年間のはじめは、正倉院宝物に代表される国際色豊かな貴族文化が花開いた華やかな時代の印象とは裏腹に、異常現象が続き、天候が不順で作物が実らず、人びとは飢えや疫病に苦しんでいました。そのうえ、政治の争いや国際関係の緊張が人びとの不安と苦悩をつのらせました。自らを「三宝の奴（仏教のしもべ）」というほど仏教をあつく信仰していた聖武天皇と光明皇后は、こうした社会不安や政治の混乱を仏教の力でしずめ、人びとの心をひとつにまとめるために国分寺や東大寺を建立したのです。

それから三百年近くの間、国分寺は国家仏教の拠点として、地方に仏教を広め、文化の向上に大きな役割をはたしました。

史跡の保存と再生

上総国分寺は、全国有数の規模を誇り、創観もよく整った代表的な国分寺です。とくに、尼寺は寺域が全国で一番広く、発掘調査によって付属施設を含めた古代寺院の全貌が初めて明らかになった国分尼寺跡として、昭和58年と61年に遺跡の主要部が国の史跡に指定されました。

市原市では、この貴重な文化遺産を保存して永く後世に伝えていくと共に、うるおいのある市民生活や新たな地域文化の創造に役立てるため、郷土の歴史や文化を見直し、遊体験する場として平成2年度から整備してまいりました。

平成5年度には、文化庁の「ふるさと歴史の広場」事業として建設した復元中門と展示館を、平成9年度には「地域中核史跡等整備特別事業」として建設した復元回廊を公開いたしました。

歴史的建造物の復元では、史跡の空間的広がりを体験し、天平建築の力強い構造美を鑑賞できるようにつとめました。また展示館では、史跡の見学に先立ち、映像や展示によって、国分寺建立の時代的背景や史跡の特色をあらかじめ理解していただけます。野外の史跡と映像や復元模型をむすびつけた演出によって、楽しく学べるように工夫をこらしました。

史跡は歴史の宝石箱。心ときめく情報が秘められています。しばし、光と影の天平の時間と空間を体験していただければ幸いです。



軒先瓦



交通 館山自動車道市原ICより市役所通り・史跡通りで約10分
JR内房線五井駅より小湊鉄道バス国分寺台行・山倉こどもの国行等にて「市役所」下車、徒歩10分

ご案内 開館時間/午前9時から午後5時まで(入場は4時30分まで)
休 館 日/月曜日(祝日の場合は火曜日も休館)・休日・12月29日から1月3日まで

入 館 料/無 料

史跡上総国分尼寺跡展示館

〒290-0073 千葉県市原市国分寺台中央3丁目5番地2 ☎(0436)21-7633

よみがえる天平の薨 いらか



法花寺

復元模型

国指定史跡

上総国分尼寺跡



牛頭天王社 金堂跡

1972年の尼寺跡



復元回廊

本道中門内側回廊・本瓦葺・単層・632㎡・桁行延長137.7m×梁間175.0m×高さ3.00



金堂跡瓦積基礎 (1988)



復元中門

木造(本瓦葺・単層)・632㎡
桁行延長137.7m×梁間175.0m×高さ3.00



展示館

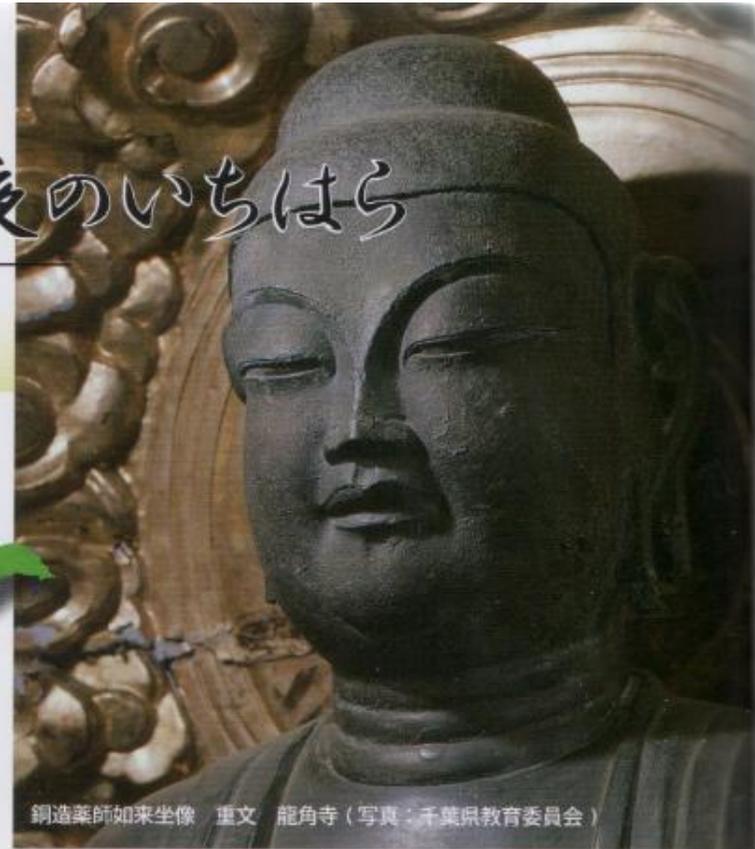
鉄筋コンクリート造・325㎡



国分寺誕生前夜のいちばら

初期寺院の建立

瓦から都との関係を読み解く



銅造薬師如来坐像 重文 龍角寺 (写真：千葉県教育委員会)

国分二寺の造営。地方では今まで類を見ない大がかりな事業でした。各国がこれを、まがりなりにも遂行したことは、まさに驚きです。おそらく、その技術背景には、寺院造営の経験の積み重ねがあったと思われます。

房総でも国分寺より古い寺院がいくつか知られています。ここでは房総を舞台に、国分寺にいたるまでの寺



院造立の流れを眺めてみたいと思います。

聖徳太子の政治で知られる推古天皇の時代のころから、国策として仏教の受容が進められました。中央政権が律令国家体制を目指すようになると、その動きにはさらに拍車がかかります。畿内で沸き起こった造寺活動は、地方の豪族にも大きな影響を与え、7世紀中ごろには各地の先進地域で寺造りが始まります。それまで盛んだった大型古墳の築造は行われなくなり、寺院の造営が新たな権威の象徴となりました。

関東での寺院造営は、上毛野・下毛野・武蔵の三か国がもっとも早く、群馬県前橋市山王廃寺・栃木県那珂川町尾の草遺跡・浄法寺廃寺・埼玉県滑川町寺谷廃寺などが、7世紀中ごろの成立とされています。

房総の造寺はやや遅れ、7世紀後半の木更津市上総大寺廃寺（上総）・栄町龍角寺（下総）を皮切りとし、7世紀末から8世紀前半にかけて活発化します。

これらの瓦には畿内官寺の文様が採用されており、房総の造寺は中央の影響下に進められたことがわかります。いずれも近くに古墳時代終末期の古墳が見出せることから、これらを築いた地域権力による仏教受容を思わせませんが、とくに上総域は畿内色の強い古墳が目立ち、古くから畿内との関係を色濃く維持してきた地域と思われるので、官寺的な寺院の導入がうなずけます。

中央政権も、これらの寺院を東国経営の拠点として、



川原寺の軒丸瓦（奈良国立博物館蔵）



山田寺の軒丸瓦（奈良国立博物館蔵）



紀寺の軒丸瓦（京都国立博物館蔵）



上総大寺廃寺の軒丸瓦



龍角寺の軒丸瓦（柴町教育委員会蔵）



二日市場廃寺の軒丸瓦

積極的に利用したのかもしれませんが。

寺院には多量の瓦を用います。軒先に位置する軒丸・^{のきさき}軒平瓦には装飾文様が施されました。この文様から、モデルとなった先進地域の寺院を割り出すことができます。地域の寺やそれを造営する権力が、中央とどのような関係にあったかを知る鍵として注目されています。

い導入は、彼らと朝廷との強い結びつきを暗示します。

■ 龍角寺（りゅうかくじ）

^{ほんぞん}本尊の^{やくしにょらいざざう}薬師如来坐像の頭部は、7世紀後半の^{はくほうぶつ}白鳳仏です。

境内に残る塔跡や礎石からは、^{ほつきじしき}法起寺式の伽藍配置が想定されます。創建瓦は^{さんじゅうけんもんなんはちようたんべんれんげもん}三重圈文縁八葉単弁蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦のセットで、山田寺の系統です。文様表現は

ちなみに房総における初期寺院の瓦文様は、畿内の官寺である川原寺（奈良県明日香村）、畿内の有力豪族蘇我倉山田石川麻呂が建立した山田寺（同 桜井市）、紀氏の氏寺である紀寺（同明日香村）の3系列があります。

■ 上総大寺廃寺（かずさおおでらはいじ）

今も残る石製露盤は、塔を含む伽藍の存在を物語ります。創建期の瓦は、面違い鋸歯文縁八葉複弁蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦のセットで、川原寺を模しています。川原寺が完成した7世紀後半に大寺廃寺も建てられたのでしょう。この寺を造営した者は馬来田国造の関係者と考えられています。中央官寺の瓦を模した寺院のいち



山田寺より退化していますが、シャープさを保っており、680年代前後の造立とされています。付近には龍角寺古墳もあり、印波国造の一族が造営に関わったのでしょう。

いちはらの初期寺院

7世紀末から8世紀初頭ころになると、市原市域にも寺院建立の波が押し寄せます。ちょうど律令制が整備され、地方豪族層の取り込みも進んだ時代にあたるようで、郡寺としての性格が想定されています。郡司層に取り込まれた豪族が建立に携わったのでしょう。

さらにこれらの影響を受け、8世紀前葉に創建された寺院もあります。この場合は郡司層より下の階層が造営の主体者となっていたようで、仏教の受容がより広く浸透していった過程をうかがうことができます。

■ 今富廃寺（いまだみはいじ）

創建瓦は二日市場廃寺とともに山田寺の系列ですが、龍角寺よりも表現が甘いため、やや新しく、7世紀末から8世紀初頭ころの建立と考えられます。上海上国造の系譜を引いた海上郡司の建立と推測されます。

■ 二日市場廃寺（ふつかいちばはいじ）

先に述べた今富廃寺と同じ海上郡ですが、4.5kmほど上流にあります。山田寺系の三重弧文縁八葉単弁蓮華文軒丸瓦と紀寺系の雷文縁八葉複弁蓮華文軒丸瓦（上



今富廃寺の軒丸瓦



光善寺廃寺の軒丸瓦



武士廃寺の軒丸瓦



菊間廃寺の軒丸瓦



左 下野国府政庁の模型（栃木県立しもつけ風土記の丘資料館所蔵・栃木県教育委員会提供）

中央貴族から選ばれた国司は、行政一般の責任者として各国の国府に赴任した。国府には国司の政務の場として政庁（せいちょう）が置かれた。奈良時代の国府政庁は、平城宮の大極殿院や朝堂院に習った配置で、上総国府も模型のように正殿・前殿の両翼に長大な脇殿を配していたのだろう。この配置は、上総国分寺の運営施設にも影響を与えることになる。国府には国司のほか、仏教指導全般の責任者として国師も赴任していた。国府と密接な関係下に営まれた付属寺院が存在しており、国分寺が建立されるまで国師の政務の場として使われたようだ。

写真)を併用しています。後者は川原寺様の蓮弁に雷文をめぐらせる特徴的な文様で、武射郡(山武市)の真行寺廃寺にも例があります。二日市場廃寺の場合、菖

双方の造営主体者同士の強い関係がうかがえます。

■ 菊間廃寺（きくまはいじ）

武士廃寺と同じような様式を認める。現代の建築史学

弁部が大寺廃寺の川原寺系瓦よりも退化しており、7世紀末ころの建立と考えられています。寺跡の付近に大規模な古墳がないことから、寺を造ったのは国造の系譜とは異なる新興豪族と推定されています。

■ 光善寺廃寺（こうぜんじはいじ）

創建瓦は山田寺系瓦の影響を受けた三重圓文縁四葉単弁蓮華文軒丸瓦（上写真）で、同例の上総国周淮郡（君津市）九十九坊廃寺よりも意匠に優れることから、これより若干古いものの、ほぼ同時期にあたる7世紀末から8世紀初頭ころの造立とされています。補修瓦としては川原寺系の影響を受けた八葉複弁蓮華文軒丸瓦などが発見されています。この瓦は退化が著しく、8世紀前半の製作と考えられます。上総国分寺創建瓦と同じ型で作った同範瓦もあり、注目されています。

市原郡の郡寺と思われませんが、国府所在郡であることから、国府との密接な関係も考える必要があります。

■ 武士廃寺（たけしはいじ）

山田寺系や川原寺系の軒丸瓦などを用いていました。川原寺系の瓦（拓影参照）はかなり退化が進んでいるようで、全体に形骸化が進み、蓮華文も肉感に乏しくなっています。これまで述べてきた寺院よりも新しい段階で建立されたのでしょうか。川原寺系の軒丸瓦は、光善寺廃寺の補修瓦と同範なので、光善寺廃寺の補修時に同じ瓦窯から瓦の供給を受け建立されたと考えられています。

武士廃寺と同じころの建立と恐れ、国分寺創建以前の寺院としては最も新しいグループと言えます。川原寺系の重流というべき軒丸瓦（上写真）などが発見されていますが、かなり形骸化しているようです。川焼瓦窯跡の上総国分寺創建瓦と同範の軒平瓦も採集されています。

国府の造営と国府寺院

天武天皇の時代ごろから、仏教の力で国を治める考えが広まり、都や諸国で護国の教典である『金光明經』や『仁王經』の講読が盛んに行われるようになりました。

市原市域を含む房総の初期寺院造立が、7世紀末から8世紀初頭ころに集中しているのは、朝廷による律令の整備と地方豪族の再編、仏教政策の活発化などの影響を大きく受けたことが原因とみられます。国家仏教の普及には、これまで述べてきたような地方寺院が一役買っていたというわけです。朝廷はさらなる推進策として、大宝2年（702）から地方僧官である国師を任命し、諸国の仏教指導に当たらせました。

国師は国府の仏舎に赴任したと考えられます。このような寺院を「国府寺院」と呼んでおり、国分寺が建てられるまで政務の場として機能しました。

先に述べた光善寺廃寺は、上総の国府寺院だった可能性があり、注目されています。

国分寺建立の素地は、地元にも着々と育ちつつあったようです。